

効果的なゴールキックは数字で測れるのか？

～ペナルティエリア内の使用に注目～

コーチング科学研究領域

5020A013-1 上赤坂 佳孝

研究指導教員:堀野 博幸 教授

I. 序論

サッカーの歴史において、ルール改正は常に戦術の進化をもたらすきっかけとなっており、このゴールキックに関するルールの改正も例外ではない。

サッカーのルール改正後における GK のプレーの研究（末永ほか，2002）や，サッカーにおけるゴールキックについての研究（古賀ほか，2002）に示されているように，ルール改正以前は，ゴールキックにおいては，ロングボールが多用されていた。

しかし 2019 年のゴールキックのルール改正で，ボール保持側の味方選手が PA 内にてパスを受けられるようになった。そしてこれまで同様，相手選手はゴールキックが行われるまで PA 内に入れない点に変更されていない。

本研究は，ゴールキックから開始される攻撃に関し，2019 年のルール改正後，PA 内の味方に繋いで始める攻撃の有効性について検討することを目的とした。

II. 方法

本研究は，2019 年のゴールキックのルール改正後の「ゴールキックから開始される攻撃のゲームパフォーマンス分析」と「ゴールキックに関する指導者へのアンケート調査」の 2 つの手法により調査を行った。分析対象は，2020・2021 シーズンの JR 東日本カップ関東大学サッカーリーグ戦 1 部リーグにおいて，昇降格 4 チームを除く 10 チーム同士が対戦した試合を対象とした。2020 シーズン後期 44 試合と 2021 シーズン前期 44 試合の合計 88 試合にて，ゴールキックから開始された攻撃 1,635 プレーを対象とした。

樋口ほか（2012）の手法をもとに記述分析法を用いて，芝の目やフィールド上の線を手掛かりに，目視でピッチの縮図にボールや人の位置を DartFishLive10.0（ダートフィッシュジャパン社製）を用いてプロットした。

本研究では，次の 4 つのいずれかの条件を満たしたゴールキックからの攻撃を有効攻撃と定義した。ただし，ハーフウェーラインを越えた地点でボールが相手に当たり，アウトオブプレーとなりスローインになったときは，結果的にマイボールではあるが，非有効攻撃とした。

1. ゴールキックから始まる攻撃が，ボールを 2 回失うまでにハーフウェーラインをボールが越えた場合
2. ハーフウェーラインを越えてパスの受け手がボールを保持（2 タッチ以上）した場合，または，パスの受け手がワンタッチでボールにプレーし，そのパスがハーフウェーラインを越えて相手陣地にいる味方にパスがつながった場合
3. ボール保持者がドリブルでハーフウェーラインを越えて 2 タッチ以上した場合
4. 長いパスの競り合いで，ハーフウェーラインを越えた地点で相手にファウルがあった場合

III. 結果及び考察

ゲームパフォーマンス分析の結果から，ゴールキックから開始される有効攻撃においては，ゴールキックの PA 外配球の攻撃プレーより PA 内配球の攻撃プレーの方が有効攻撃になり，効果的であることが明らかになった。しかし，ゴールキックにおける PA 内配球の割合は 19%であり，PA 外配球に比べて，

その頻度が少ない。今後は、PA 内配球のゴールキックを増やすことで、有効攻撃の回数を増やすことができる可能性がある。

また、一般的に天候不良時やグラウンド条件が悪い時は、PA 外配球によるゴールキックを選択しがちであるが、適切に環境を見極めて、PA 内配球を選択することも有効攻撃を成功させる戦術となることも示唆された。

PA 外配球のゴールキックの攻撃に関しては、有効攻撃や競り勝つために、効果的な配置による配球エリアが明らかとなったが、PA 外配球の 1,319 回のうち 83 回 (6%) は、誰も触ることなく直接ピッチの外で相手ボールになっていた。このことから、GK の狙う場所の意識は大切ではあるが、狙ったところに正確に蹴れるパスの精度を高める必要があるといえる。

アンケート調査の結果から、半数の監督がゴールキックを PA 内に配球することに積極的でないことが明らかになった。ルール改正に伴い PA 内の味方へパスを配球できるようになったものの、リスクを鑑みて、これまで同様に PA 外配球のロングボールが多用されていることが推察された。

一方で、ゴールキックの PA 内配球に対して積極的な監督のチームへの働きかけや戦術は、PA 内へ配球して攻撃するプレー回数の増加や有効攻撃の増加につながっていることも明らかとなった。このことから、監督が PA 内配球による攻撃戦術を追求し、ゴールキックから可能となった PA 内を利用し、リスクを恐れず後方からビルドアップし、ゴールを目指すトレーニングを構築することが必要であるといえる。

本研究から、ゴールキックからの攻撃に関する有効攻撃の回数を増加させるために、PA 内へ配球して攻撃することに積極的に取り組むことが有効な攻撃戦術の選択肢であることが示された。また、PA 外配球の攻撃プレーに関しても、ゴールエリア内にボールを置く配置場所に対して有効攻撃につながる配球エリアの存在が明らかになり、PA 外配球の攻撃プレーにおいて有効な戦術を持っているチームは、ほかのチームと比べ有効攻撃の割合が有意に高かった。これらのことから、指導者は、ゴールキックの PA 内外の配球攻撃への戦術・戦略を持ち、選手が状況に応

じて PA 内外の配球を判断できるように指導を行うことが重要であると考えられる。

IV. 結論

本研究のゲームパフォーマンス分析の結果、以下の 5 点が明らかになった。

1. ゲームパフォーマンス分析の結果より、ゴールキックを PA 外配球の攻撃プレーより、PA 内配球の攻撃プレーの方が有効攻撃（ハーフウェーラインを越えてプレーする）につながる。
2. ゴールキックの PA 内配球による有効攻撃は、グラウンドや天候に左右されない。
3. ゴールキックの多くの割合を占める PA 外配球の攻撃プレーにおいては、ゴールキックの直後に 85%競り合いが行われ、そこで競り勝つことが有効攻撃につながる。
4. PA 外配球の攻撃プレーは、ゴールエリア右側にボールを配置し、右側のハーフスペースに可能な限り遠くへパス、またはゴールエリア左側にボールを配置し、左側のサイドレーンに可能な限り遠くへパスすることが有効攻撃につながる。
5. PA 外配球の攻撃プレーにおけるゴールキック直後の競り合いに競り勝つためには、ゴールエリア左側にボールを配置し、左側のサイドレーンに角度を意識したパスが効果的である。

本研究のアンケート調査の結果、以下の 2 点が明らかになった。

1. 監督の PA 内に配球するゴールキックに対するチームへの働きかけや戦術が、PA 内へ配球して攻撃するプレー回数の増加や有効攻撃につながる。
2. PA 外配球の攻撃プレーも監督の戦術が有効攻撃につながる。

本研究においては、ゴールキックの PA 内配球の攻撃プレーは効果的であることがいえた。一方で、ゴールキック時の時間帯やその時のスコア状況、また得失点直後などのゲーム状況との関係性や、ゴールキックの判断の多くを占める GK の心理面との関係性を明らかにすることが望ましいといえ、今後の課題として挙げられる。